白い騎士と魔法少女達

召霊使い

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

白い騎士と魔法少女達

【Nコード】

N8157L

【作者名】

召霊使い

【あらすじ】

もしも魔法と出会って、と言うあり得ない夢から始まる。

夢で終わるはずだった虚構は現実となり、青年・齊藤一光は魔法少女達にであった。

オリジナルキャラ・ステータス（前書き）

はい、度々行きずまっでは削除してます。

今度は頑張りたいなあ

オリジナルキャラ・ステータス

・ 齊藤一光

・ トリップ前/トリップ後：二十歳/十一歳

・ 身長&体重：166cm / 60kg ・ (変化無し)

・ 特技：頑丈・機械工作

・ Favorite：努力・平和・笑顔・信念

・ Dislike：長時間業務(十二時間以上)

・ レアスキル：マジックデリート魔導削除

・ 作案備考

転生物はよく見るのでトリップ物に変更。

時間軸的にはPSPなのはs t o r yと同時期に調査されていた
ロストロギア『歪みの欠片』暴走により強制転送・肉体年齢退行と
様々な不幸に見回る。

4

強制転送で海鳴市を訪れ、なのは達と出会う。

次元漂流者として次元管理局に保護、アースラにてリンカーコア、
つまりは魔導士の素質を持つことから試験稼働を控えたミッド式と
ベルカ式の混合型『白式』のテストを名乗り出る。

魔導士としては日々、ヴォルケンスやなのは、フェイト、クロノ
に教わって訓練、傍らでミッド・魔法関連の一般知識を身につけ、
レアスキル『魔導削除』を絡めた戦闘はなのはにスラーライトを解
禁させる程のレベルである。

キャライメージは上条当麻。

prolog・白い騎士の夢

自分、齊藤一光は広くて、黄金の草がカーペットのように茂る野原で白い抜き身の刀を持つ青年とよく向き合っている夢を殆ど毎回見る。

白い籠手は無駄に厚みがあり、金属部ならバックラー程度の盾にはなりそうな大きさ、ブーツもホワイトに近いグレー、そして何処か機械的な雰囲気纏う。

籠手とブーツだけではない、黒色のアンダーウェア、腰部には脇腹を護るように白い装甲が左右対になるように三枚、ズボンも白いジーンズをそのメカブーツに膝まですっぽりと覆われている。

対して自分は剣道の防具を装着。一つ違和感があるのは竹刀ではなく真剣を腰に携え、酷く落ち着いて対峙していること。

「始めよう、俺。」

二人の自分は只静かに刀を構えた。

白い騎士の構えた刀は意思に応じる様に唾の装甲を開き、廃熱と刀身を光が包み、刀と呼ぶには不釣り合いな大太刀へ代えた。

「悔いが残らないように、思いつ切り、大切な者を護れるように。」

そして、異様にも二人は十メートルを一瞬で踏み込んだ。

ぶつかり合う金属、伝わる振動。

大太刀を大きく振りかぶる白騎士に、自分は下段の構えからすく上げるような感じで胴を狙って一閃を繰り返す。

「強くなれ！」

白騎士はそれこそいきなり消え、剣を振るう。

今度は左から、右、上、きりが無い斬撃を凌いだ。

「彼女を護れるほど・・・強く鋭い刃となれ！」

打ち続けられ、受けるにも限界が来ていた。

なまじ剣道と言う型にハマった自分は、実戦から色々な経験を吸

収し、型の外れた白騎士にかなう訳などなく手にしていた野太刀は弾かれ、宙を舞っていた。

振り下ろされる刃に、おもむろに突きだした右腕が裂かれるはずだった。

しかし、逆に刀身を象っていた光は一瞬で消滅。

自分は何が起きたか理解できなかった。

「俺には、力がある。だから自覚し、そして“俺を使え”。」

毎回、白騎士は止めを刺さずにこう言うのだ。

「俺は『』だ。」

名乗ったのだろうか聞こえず、毎回夢はここで醒める。

「また……か。」

何故同じ夢を見るようになったか？

気にはなる、夢でも醒めてみると異様なダルさが残っていて、実際に動いたような疲れもある。

「……駄目だ、怠い。」

布団に倒れ込む、二度寝すれば夢の続きを見れるのではないか？

そんな気もするが皮肉にも出勤日で、夢を気にしつつ支度を始める。

まるで対だった。

魔法があるならあんな姿の剣士がいても不思議はない。

しかし、右手に触れた瞬間、光刃が消えたのは何故だろう？

それに「力がある」とはどんな意味か？

白騎士に対して自分は黒かった。

剣道の防具は紺色が多い。しかし、夢で自分は面をしていなかったし、何より着物から真つ黒だった。

思えば思う程、考えれば考える程、目の前の仕事は手に着かない。
しかし、怠い。

魔法でもあるなら大助かりだ、手早く仕事が片付く気がしてきた。

結論から言おう、やはり魔法なんて眉唾物かも。

今日日無駄に多い生産数、景気の回復は有り難いが生産数が爆発的に増えるのはやはりどうかと思う。

しかもだ、魔法とか思った矢先に分割機の故障トラブルに見舞われる等、やはり科学の結晶は日々の手入れが掻かせないようである。

散々な仕事を終え、帰路でのことだ。

ぱりっ、と何かを剥がすような音がした数秒後、盛大にガラスを割るようなガシャァン！と音が響いた。

驚いてブレーキを踏み、辺りを見る。

車窓からは目立った変化は見取れない。

「気のせいかな？」

クラクションが煩い、このままでは後ろのドライバーに殴られそうだ。

刹那、騒音が消えた。

「何だよ“アレ”？」

ふとミラーを見て青ざめた、何かが迫ってくる。

逃げるべく車を離れた刹那、車が“消えた”。

次いで自分も事態が飲み込めなかった。

何せ、現れたのは黒い流動的な人型の塊と破碎球を担いだ少女だった。

「んー」^{リバースワールド}“反転世界”の影響を受けないんだ。流石、ロストロギアが選んだだけある、ねっ！」

ブオンツ！と音が響くと同時に自分は衝撃に吹っ飛ばされた。

左から喰らったソレは先の少女が振り抜いた破碎球だった。

左腕が酷く痛む。

「闇に、吞まれる。『白騎士』」

その単語が発せられた瞬間、右手を突き出す。

流動的な影から伸びた鋭い何かは滲み始めたペンキのように崩れ始める。

「私では『魔導削除』を受けるようだ、頼む。」

影が少女に頭を下げる。

少女は不満げにしかしきっぱりと言いつつ。

「貴方をアイツ等と逢わせるわけにはいかないから！死んじゃえっ
！！」

ゴパア！と津波のような何かが、自分を押し流した。

空間が軋む、数回軋むと“空間が割れた”。「なっ！？」

咄嗟に後退していた自分には“裂け目”から逃れる手段はなく、
ただ飛び込むしかなかった。

間髪入れずに破碎球が数秒前に頭のあった部分を通過する。

(やべっ………落ちる！？)

「これで“抹消者”は白騎士へなるな」

取り残された影は呟くと少女は鼻を鳴らした。

「なら、アイツ等ごと消すだけよ。あー、帰る？この時間軸は疲れ
るわ」

少女達との遭遇

「楽しみだね、三家族合同旅行！」

少女はツインテールを揺らしながらはしゃいでいた。

「凄いいよね、楽しみだなあ」

金髪のツインテールの少女も控え目ながら浮かれているようだ。

この世界の誰も知らないまま、少女達が関わった事件が終わって一週間が経つ中、時空管理局は芳しくない状況だった。

新型デバイスの開発が急がれたり、各地で発見されたロストロギアは決まって暴走・消滅を繰り返す。

彼女、高町なのはとフェイト・テストロッサは未だ、『歪みの欠片』が生んだ敵を知らず、味方も知らなかった。

ちなみに、血眼で回収までこぎ着けた『歪みの欠片』から得られた情報は無い。

現在、全力で分析中。

最も囑託魔導士、民間協力者の二人には詳しい話は回らない。

「それじゃあ、フェイトちゃん。送ってくれてありが……」

なのはが言い掛けたとき、フェイトが暗い空を見上げていた。

「どうしたの？フェイトちゃん。」

「何か落ちてきてるような……」

フェイトが言い終わるより速く、二人の間に少年が落ちてきた。

「ひっ、男の子!?!」

「なのは、救急車!!」

パニックになるなのは、意外と冷静だけど内ではかなりパニックのフェイト。

二人はあたふたと携帯を開いたときだ。

「ハア！ハア、ハア……つてえ!!」

少年は息を吹き返した。もとい、背を強打し、詰まらせていた息を吹き返した。

約二分前、自分は二階と三階の間、三階の窓越しに文字通りテレポルトされたかのように現れた。

「うおっ!？」

咄嗟に手をのばした先には街灯のポールがあり、何とかつかめた。

グキッ!と素晴らしい異音が響いた。

うむ、関節が逝ったかな?滅茶苦茶痛いんだけど!!

「しかし、此処は何処だ？」

自分はこんな場所を知らない。

にたような場所は何処にでもあるが目線の先にある『海鳴市』と言っ街を知らなかった。

我が身に異常事態が起きているのは明白だった。

しかし、冷静でいる自分に驚き半分感謝半分だ。

冷静なおかげで状況を把握出来る、同時に驚きもした。

何とというか自分の鈍さに。

「しかしながらどうするかな？」

左腕は言うことを聞いてくれない。

しかも、ぶら下がるにも限界を迎えて、落ちてしまいそうだ。

落ちたところを誰かが見れば、この閑静な雑居ビル街だ。自殺と
か思われても可笑しくはない。

ずっとぶら下がっているわけにもいかないのだが、手がすっぱ抜
けた。

「あゝっ！！」

蛙を踏んだような声を出した自分は、そのまま落ちた。

思いつきり背を打ち、息を詰まらせていると両サイドで少女があ
たふたと混乱状態になっていた。

で、危うく救急車で病院に搬送っていう所で息を吹き返した。と
いうのが現在に至るまで流れだ。

落ちたのが二階程度の高さで良かった、目の前で死なれたらトラ
ウマだろうな、見ず知らずの他人だろうと自分はそうだ。

「大丈夫ですか!？」

茶髪の子は相当混乱しているようだ、まあ無理もない。

「ああ……背中が痛いこと以外は」

ああ、感謝だね。無駄に頑丈な自分に。

しかし、視線が痛い。

ついでに腕も痛い。

なのはは混乱していた。

いきなり人が落ちてくれば誰しも混乱するだろうがフェイトはな

のは程混乱した様子が表にはでていなかった。

「大丈夫ですか!？」

と問えば、「ああ……背中が痛いこと以外は」と言う。

奇妙な電子音の後に突然、モニターが現れた。

『なのは、こちらクロノだ』

「クロノ君!」

『フェイトも聞いてくれ、さっき本当に小さな次元振を観測した。』

「次元振を?」

『それとね!』

割り込んだのだろう、先の少年らしい『うわっ!エイミー』とか聞こえた。

『観測直後に変な魔力反応が確認できて、丁度二人の近くからなんだけど』

エイミーがモニター内で首を傾げ、キーを打つ。

「エイミーさん、話にでた反応の人、目の前にいるかも知れませんが」

「

なのはいきなり冷静になり、自分をガン見している。

(何?)

恐らくはかなりヤバイ状況なんだろう。

二人の少女は真顔になっている、さっきまでの混乱状態が嘘のよう。

『は？なのはちゃん、もう一回お願い』

エイミーの間の抜けた、いや、なのはの返事が予想外だったただけなのだが。

「だから、多分ですけど、その反応の人が目の前にいるんです。」

『それじゃあ転送ポートを開くから、アースラまで同行して貰えるかな?』

エイミィの口調は半信半疑だった。しかし、センサーでも確認できているのでクロノに指示を求め、それをなのはに伝える。

「了解!」

フェイトも同様の支持を受け、肩を押さえた少年と向き合った。

「あの、一緒に来て貰いたいところがあるんだけど時間大丈夫?」

なのはのセリフに少年は呆気にとられていた。

闇と白と抹消者（イレイザー）

少女二人について行く事早何秒？恐らくは二秒経ってないだろう。

いきなり光が視界を支配して施設内に風景は移る。

それも全く知らない風景だ、通路の床は光っていて電光かと思ったらソレらしい配線はない。

遺跡のような柱がアーチを描き、所々に光体があつてそれが通路を照らす。

「まるで魔法みたいだな」

口をついた言葉は、この空間に使われている技術の高さへの感心、いや感動といつても良かった。

物作り、あるいは機械工作・電子創作が趣味の自分からすれば、これだけの高技術に遭遇することはないだろう。

自分が置かれた状況など忘れる程、感動していた。

「魔法は在るんです。信じられませんか？」

先の少女二人とこれまた14か、16くらいの少女、同い年だろう少年がいた。

「艦長がお待ちですので詳しくは艦長からお伺い下さい。我々もア
ナタに聴きたい事がありますので。あ、申し遅れました。僕はクロ
ノ・ハラオウンです」

と業務口調の少年に先導され、通路を歩いていく。

待てよ、艦長？船なの！？

船の艦長室と言うには少し異彩だった。

普通、船に盆栽は持ち込まない。

「はじめまして、アースラ艦長のリンディ・ハラオウンです。」

「はあ、齋藤一光です。」

と自分も名乗り出したは良いのだが、リンディの容姿に目を見張った。

理由は、少年・クロノにある。

ファミリーネームが同じと言うことは親子だろうが、リンディはどうみても二十代前半だ。でも、クロノは多分15歳前後だろう。

「女性の年齢詮索は良くないわよ？一光くん」

おー、読心術。本当に何者？

「さて、単刀直入に言うと貴方は次元漂流者ね」

全く新しい単語と遭遇することがなくはだろつな、長い人生。

はて、漂流者ねえ……。

「質問いいですか？」

「ええ、何でしょう？」

「その次元漂流者とはどんな意味で？」

クロノは、話したでしょう？みたいな顔をしている。

すまん、忘れたわ。

「そうね、わかりやすく言えば世界を股に掛けた迷子かしら。」

恐らく自分は今、物凄く間の抜けた顔をしているだろう。

「はい？」

「貴方が何故、こんな境遇にあっているか分からないだろうけど」

「さらに質問！これは最初にすべきだと思ったけど……時空管理局って何だ？」

この後、ハラオウン親子からみっちりと説明があった。

つまりはこうだ。

自分は今、“元居た世界”から閉め出されたかはじかれた状態でさまよい“この世界”にたどり着く。更に管理局に属す彼らが自分

を見つけたのは魔力とやらを自分が持つていて、そいつの反応があり、偶然にも民間協力者の少女たちの前に落ちてきた。

よし、ここまでは大体飲み込めた。

しかしだ、リンディヤクロノも分からないのは自分の“世界の現地惑星名称”が地球と“この世界”と同じってことだな。

一様、“元の世界”が見つかるまで最低限の生活は保証してくれるらしい。

しかし、だ。更に驚くべき不幸は自分が生きていた時間、解りやすく言う顔付きとか身長とか何か退行してんのよ。

道理でリンディに二十歳ったら笑われるわけだ。
でも事実現実。

ぶっちゃけ、9年間分人生リセット。

不幸だー！

更に“あの時”から争いは自分を逃がさなかった。

既に日は変わりつつある為、一時的にリンディが家に来ないかと言ってくれたのは嬉しくもあった。

しかし、仕事が入り、フェイトが居るからと自分は教えられた住所を目指しているときだった。

「うおりゃあああ！」

気合いに満ちた声が目をつんざき、振り向くとハンマーが眼前を掠めた。

「うおっ！あぶねえな、おい！！！」

咄嗟に身を反らせ、一撃を避けると辺りは陽炎のように色褪せている。

初めと同じように。

「逃げんなっ！」

それは赤いワンピースタイプの服を着た少女だった。

手にはハンマー、やはり彼女が振るっただけらしい。

「無茶だろ、それ！」

鬼気迫るとはこの事か、身を翻しながら自分は右手を強く握り、少女の撃ち出す光球を殴りつけた。

パキン！と光が弾け、サイズのには野球ボールだろう。鉄球が二発、脚に当たった。

「痛っ！」

ば！
ぶらぶらと意に従わない左手が恨めしい、関節さえはまっていれば！

「大人しくぶっ潰れる！」

急激に、いやハンマーヘッド“その物”が変化したといっても過言ではない。

達磨落としてもするようなサイズに変化したハンマーを少女は振りかぶる。

(すんげー痛てえだろうが……加減しないで、一発で填めるには！)

左腕が動けば少しは違う、そう思うが説明を受けている最中とか忘れていた脱臼を填める手段を思いついた。

自分でもあり得ないと思える、少し前なら。

否、今でも。

「ぶち抜けーっ！」

「チャアンス！」

とても耐えられる衝撃ではなかった。

一撃を左肩で受け、ゴキッ！と確かにハマりはしたが、踏ん張りきれずに吹っ飛ばされてブロック塀に直撃した。

額を伝う血、しかし填める事は成功だ。

「なっ、受けに行った？生身で！？」

少女は唾然とし、驚いていたが肩に走る痛みは忘れようがない。しかし、両親には感謝しきれない。

頑丈な軀は、実に良い。どう言うわけか解らんがああ愛称が実にしっくり来るな、我ながら。

「うむ、彼奴等は良くも悪くも皮肉満載ニツクネームを付けたもんだ。」

でも、どうするかな？相手は蒼空飛べるみたいだし。

「何言ってるんだ！？テメエ、何モンだ！？」

やるか、凡人なりに喧嘩だな、喧嘩！

と意気込み、左腕をぐるりと回す。痛みはない、よし。

かという少女は更に警戒を強め、何故か笑う。

あの、怖いんですが。

「不幸の擬人化は、固いぞ。多分」

「おもしれえ！ぶっ殺す！！」

「ふえ？男の子が！？」

『そうなの！闇の断片に運悪く捕まっちゃって、しかもわざとヴィータの偽者の一撃受けてふらふらなの！』

ほぼ一部始終がアースラでモニタリングされていた。

最もこんな事は予想外であったため、対処にあっただっているスタッフは別地へ。協力要請を受けていたのはとフェイトが向かっている最中だ。

「わざと！？エイミィ、それで彼は！」

『いくらヴィータが偽者でもね、生身で頑張ってるよ！不幸の擬人化は固いんだって、でも喧嘩慣れしてるよ。彼』

送られる映像に二人は驚いた。

角を曲がり、それを物ともせず、砕く偽者へ右拳を叩き込もうと踏み込む。

展開された障壁が単なるパンチで砕かれ、偽者共々ギョッ！とする一同。

「何したの!？」

『多分レアスキルだ、二人は彼の救助を。僕らでこっちは何とかする。幸い事態は収束に向かっているしな』

「無理無理無理!!!」

コンクリート塀ごと吹き飛ばした、否。叩き砕くチビッコをどうするかが命題だ。

(あそこまで見栄切ったからな、何とかしないと)

「ちょこまか逃げんな！」

「煩い！俺は蒼空飛べないしそんな出鱈目アタックできないんだよ」

何も目的なしに逃げ回っているわけではなく、あの少女は“右手で消せる”。

何度か試みたパンチ、掠ったときに姿がブレた。

自分は確証を得て少女の意表を突くために隠れて回った。勝利への逃亡とはまさに今回のようなものか。

曲がった先に高台へ通じる階段を見つけ、幸いな事に少女は低空飛行だ。

ワンチャンになるが、届く。

「いい加減にしろお！！」

すくい上げるように振ったハンマーの持ち手が伸びた。

当たらないと言う安心感は消え、必死に走る。

「そりゃ反則だろ！！」

走りきる事叶わず、自分は宙を舞った。

“右掌から先”しか効力を持たないこの力は少女の振り込んだ八ンマーを支える力を無くすと同時に、背から落ちた自分は息を詰まられ、せき込むと同時に死を覚悟した。

痛みを感じない辺り、満身創痍の軀で無茶をしすぎた。

「大丈夫!？」

少女が閃光に飲まれ、金髪ツインテールの少女・フェイトが問いかけてきた。

未だに息が詰まってまともに呼吸も出来てないが何とか声を絞り出した。

「だい……じよぶ……多分」

「無茶しすぎだよ、キミ」

驚いたのは最初に出会った二人の少女が助けしてくれた事ではなく、二人の居る位置だ。

宙に浮いている？飛んでる!？

「え、お!？」

「ダメだよ、無茶して。」

この時、闇の欠片事件の渦中で魔法の存在を自分は認識し、自らの力を再確認した一夜となった。

それからの道は、民間協力者として行く道を自分は決めた。

それからと言うものの、皆口をそろえて、頑丈だと言っていた。

偽者のオリジナル、つまりは本物のヴィータは何故か悔しそうにしていた。

本当に何でだろう？

あれから三週間、年も明けた一月。

自分は今、ハラオウン家に居候していたりする。

何でも稀少能力レアスキルを自分は持っているらしく、殆ど息抜きの時間などないほど訓練漬け、付き合うクロノもよく体が持つものだ。

今はミッドチルダの言語と一般知識の本を読みあさった所だ。

「カズも大分飛べるようになったよね？」

フェイトとも大分打ち解けた。なのははいろいろ聞いてきたりしてすぐ打ち解けたし、はやてとも普通には話せるようになった。

シグナムはアレだ、いきなり模擬戦とか言って酷い目にあった。

それから何気なく話せるようになったな。

「まだまだ、フェイトちゃん達程自由には行かないよ。」

「でも『魔導削除』の作用もあるし、それがなければカズも今頃飛べるようになってると思う。」

「そうかな？」

「そうさ、無駄に頑丈なアンタは飲み込みも無駄に速いしね」

とフェイトの傍らに座っていた子犬が言う。

アルフ、フェイトの使い魔で今は子犬フォーム。他に赤毛に近いオレンジ髪の女性の姿とオレンジ毛の狼形態がある。

右手に宿るレアスキル『魔導削除』は魔法なら何でも消す特性を持ち、自分の発動する魔法も例外に漏れずに消してしまう。

それを頭に入れて飛ぶのは普通とは違うのだ、今は短距離飛行が限界で、近々試作デバイスが囑託魔導師を希望した自分にデータ収集の為に授与されるとか。

アースラでリンディ、クロノ、エイミィは送られてきたデータに目を通していた。

「しかし、まあ見事に失敗続きね」

ミッド式・ベルカ式の混合型、先の事件から学んだ事を生かすためにリンカーコアと同調するシステムは使用者のレアスキルをそっくり増加・強化する。

「でも、簡単に手放さないですよね？こんな」

エイミイの意見は最もだった、異質なまでに手の込んだ試作機を稼働データがほしいとは言え民間協力者に譲るなど有り得ない。

「あるいは必要なくなっただか」

「まさか、こんな風に転ぶとはねえ……クロノ、カズ君はどう言ったのかしら？」

この件は既に一光へ知らされていた。

上層部は使い捨ての駒として一光を使う気だとすぐにリンディもクロノも察しがついた。

破棄寸前の実験機を使おうと言う物好きは居ないだろう。しかし、何事にも始まりはあると一光は笑い飛ばしていた。

「何事にも最初の一人はいる、だそうです。」

クロノは肩を竦めた。

こちらの心配を余所に一光は実験機との対面を楽しみにしているのだ。

「そう、なら全力で支えてあげましょう。彼の気持ちが無駄にならないように。」

現物がアースラに届いたのは、翌朝のことだった。

「今からでも既存のデバイスを用意できる、無理に実験機を使うことはないんだ。」

クロノは相も変わらず自分が実験機を使うのが気に入らないようだ。

心配してくれるのは嬉しいが、だからと言って避けていては先には進めない。

魔導削除が影響する以上、デバイス補助なしでは魔法の使用にも限界がある。

ちなみに今、なのは達は学校である。

帰宅後、デバイスの調整も兼ねて模擬戦をする予定だ。

うむ、死ねるな。

「気持ちはいけたいけど上がくれるってんなら貰う。」

そうだ、そこにどんな裏があるつと。

「分かった、もう何も言わない。」

クロノは折れた。

いや、呆れただけかも知れない。

部屋に付くと待機形態のソレはあった。

地図で言う戦マーク、白と蒼の刀が交差したネックレスタイプの
デバイスはケース中で浮いていた。

「上層部に確認取ったら稼働データだけ定期的に送ればいいって事
らしいから、思う存分使っちゃいなよ！」

エイミイもどこか諦めを漂わせていた。

エイミィは初め、命令とは言えクロノが話しとき、反発したほどだ。

(稼働データだけ？んなわけないだろ)

自分だってバカじゃない、時空管理局も思惑一つで動いているわけではないだろうし、犯罪者と繋がりを持つ者もいるかもしれない。

「起きろ。」

ケースから取り出し、咳くが反応はない。

「そう言えばコレ名前とかあるの？」

読みあさった中にデバイスに関する基礎知識のような本があった。

名前が設定されているデバイスは管制AIが反発することがあるとかで、なのは達はレイジングハート、バルディッシュと愛機を名で呼んでいる。

ちなみにAIにも疑似的に性別がある、レイジングハートとバルディッシュは女性AIだ。

「名称は『白式』。さあ、セットアップしてみて」

リンディは微笑みながら促してきた。

夢の姿がフラッシュバックする、クロスした刀は水晶になっていて点滅しながら問いかける。

『キミがマスターか？』

「ああ、白式。セットアップだ」

『ふむ、破棄されずに使い回されるとはね。キミはスキル持ちか、良いだろう』

わずかな閃光が自分を包み、バリアジャケットと言っには少し機械的な籠手とブーツ。

そこには夢と同じ、“白騎士”の姿の自分が居た。

『リンカーコア同調完了、マイマスター・一光承認。これで僕は、マスター専用の剣だ。特性はおって説明しよう。』

白式は饒舌に語る。

柄には鏢と言つには異様な装甲がついていた。

水晶部分も組み込まれているところから見て起動形態、デバイスモードは刀を模した型の物の様だ。

刀身は蒼い水晶タイプ、煌めく光は鋭さを帯びていた。

「特性？魔法の使用を支援するとかじゃなくて？」

『それは基本機能だよ、僕は既存とは違う部分を持たされた。マスターの力を増大・補強する物だ、だからマスター。右腕の力は僕にも同調している。』

つまり、『魔導削除』の強化版か？

『的を射ては居ないな、業に転用する。それが僕の能力だ。』

白式の言うことをこの時、自分は理解できていなかった。

普通とは違つと言つことを、自分の思いを体現する剣だと。

「白い甲冑か」

控えていたヴォルケンリッター、訓練室で自分を見たシグナムが
呟いた。

「何だよ、そんなんでアタシとアイゼンは止まらねえぞ！」

続いてヴィータが威嚇にも取れる事を言った。

「ザフィーラは無言だ。」

「助かるな、でも警戒はしてる。」

『マスター、零落白夜は多用すると持たないぞ。』

「どうやってやるのか分からないが白式の台詞を頭に留めておく。」

「因みに最近のウォーキングがコレ、割と本気のヴォルケンを捌
ききるのがキツイ。」

「模擬戦同然のソレは消耗するなという方が無茶だ。」

デバイスを得た今なら、少しは楽になるかも知れないが。

「それでは始めよう、内容は同じだ。五分避けきる、あるいは撃墜して見せても構わん。」

「ボツ！」とバリアジャケット姿であったシグナムの剣、レヴァンテインが刀身に炎を纏う。

同時に自分は白式の警告を無視、既に登録済み魔法、零落白夜を発動。

装甲が開き、廃熱し、刀を包むような光刃が形成される。

「僕の最大の特徴、スキル強化と転用、代表的な攻撃を使うんだね。」

零落白夜、白式の特性であるスキル増減効果と攻撃への転用、そのため威力は毎度違うが、基本威力は高い。

構成された光刃は、意のままにサイズを調整できる上、使用者のスキル能力と同じ効果を持たせる。

イメージは紫電一閃のソレと被るがマスターを得た白式は『魔法を消す刀』と言う力を得た。

しかし、これには莫大な魔力を消費するため、多用は出来ない。

「斬るっ！」

交わった瞬間、レヴァンティンが纏っていた魔力が消えた。

シグナムは目を見張った、それはシグナムだけでなくヴィータやザフィーラもだ。

話には聞いていた破棄寸前の実験試作機は主を得て完成したように見えた。

「面白い、ならば！」

「ハッ！待てシグナムっ頼むから！真剣で切りかからないで！」

スイッチの入ったシグナムは鬼だった。

星と雷光と夜天と白

なのはとフェイト、はやてがアースラを訪れると屍があった。

否、一光である。エイミイは苦笑、クロノはため息、リンディは笑顔だ。

「あ、カズ君が死んでる？」

「シグナム、何があったんですか？確か今日はカズのデバイスが届くって」

なのははすぐに一光の元へ、いつもウォーミングの相手をするシグナム達に話を聞くフェイトとはやて。

「みんな、何があったん？」

「いや、これには色々と……」

「色々？」

「怒らへんから言ってみ？」

珍しく歯切れの悪いシグナムにフェイトは首を傾げ、はやては追求モードに。

「話すとき長いですけど」

とシヤマルが語り出した。

零落白夜で紫電一閃を消されたシグナムは、決闘マニアと言う癖に火がついた。

魔力が通じないならと純粹に剣と剣の戦いになった。

「シグナム、楽しそうだな。」

「一光は必死だな。」

いつもなら参加するはずのヴィータとザフィーラは珍しく遠慮しがちにその光景を眺めていた。

「ちよつと！殺す気か！？」

パラパラと前髪が落ちた。

自分的にかなり不味い。しかし、どうやって脱するか？

「打ち倒せるなら構わんぞ？」

シグナムはそう言いながら打ち込んでくる。

上、右、左とレヴァンティンは縦横無尽に操られ、受け止めるにも限界が迫る。

まるで、夢のように。

「畜生っ！」

吐き捨て、自分は駆け込んだ。

「白式！」

『零落白夜、起動』

入ると確信したシグナムは烈火の刃を打ち込んだ、それを細く鋭く錬磨した白刀が迎え撃ち、敗退。

自分はダウンと言うわけだ。

しかし、零落白夜が当たってれば違つたろう。

自分は剣道を基盤においた付け焼き刃だ、仮に経験から技術を吸収していれば少しは違つはずだ。

そんな淡い夢から覚醒した自分は、のぞき込んでいるのは達に驚いた。

「おわあ！」

「ふあっ！」

変な声を上げたなのは、どうやら不意打ちだったらしい。

「び、びっくりしたあー」

「こっちの台詞だったのー！」

「流石男の子や、元気やねー。」

ダメだ、はやてがずれている。

大体、さっきまでダウンしていたんだから空気に決まっているだろう。

と言うより自分でも驚きだった。

今までは動けない程疲労していた。デバイスがあるだけでここま
で違うものなのだろうか？

「そつや！カズ君、デバイス貰ったんやろ？見せてくれる？」

はやては思い出したように屈託のない笑顔を向けてきた。

自分的にはこの後、予定から行けばフェイト&なのはと調整がて
らの一戦があるのでその時に見れるから待機状態で渡す。

「なんて子なの？」

「合戦マーク？」

「うー、何かレイジングハートとはまるで違うよ。」

なのは何を期待していたんだ？当然だろ、白式は一様次世代機だぞ。

実験も兼ねてるからイジリやすい方が良いだろうし。

「白式だよ。」

「ほー、百式かぁ」

「いや、はやて。わざとか？」

「白式と言つと白いのかな？」

「白いわよぉ、さっきの何て危うく真紅に染まるところだったんだから、ね？クロノ」

明らかに楽しんでいるリンディはクロノに話題を振るとクロノは苦笑した。

「何ですか？艦長、それよりもなのは、カズ。速く準備してくれ、初期稼働データを取らないといけないんだ」

「はっ？取ってないんか!？」

「驚く、本と驚いた。」

既に取って転送済みだと思っていたが違うようだ。

鬼畜か？この調子だとマジ死ぬぞ。

「えへへ、お手柔らかに」

微笑むのはが怖い、お手柔らかにも何も無い。自分はただ死なないように逃げ回るだけだ。

場を移して訓練室、広い空間にレイジングハートを起動し、先程までの日常の顔ではない真剣なのはがいた。

かという自分は白式を下段に構え、潔く散ろうとか考えていたりする。

ここまで来たら諦めるしかない、武士らしく潔くなるって自分
武士じゃないし。」

一様意地もあるからな、年下の女の子には負けたくない、否。負
けられん。「それじゃあカズ君……行くよっ!」

なのはがステップを踏むとともに意識外に消える。

「パターンは後ろか?」

その場で体を低く保ち、振り下ろされたレイジングハートを避け
る。

『マスター、次の手はあるのか?』

白式の記憶する戦い方とは変化していた。

数時間前の物から吸収した経験は、時間をかけることなく還元さ
れている。

「くっ、流石!」

後ろに繰り出した蹴りはラウンドシールドを展開し、防ぐなのは
蹴りを支点にサマーサルトキックの要領で白式がラウンドシールド

ドを裂いた。

観戦組も驚いていた、先にシグナムが翻弄して見せた動きを一光はしてみせている。

なのはも魔導師として高いレベルにいる、魔法と出会って間もない彼女を知っているフェイトはその成長速度になのはに通じる物があると感じた。

(でも、なのは以上だ・・・)

かというなのはは得意の砲撃に移る。

大火力の一撃は防ぎ切れた者は少ない。

足止めのバインドは力任せに引きちぎられて狙いが付けられない。

ブリツツアクションイグニッションブーストと瞬時加速の併用は、砲撃タイプのなのはにとって相性が悪すぎた。

高速戦闘では多用されるブリツツアクションを殆どのステップに取り入れ、隙あらば斬り掛かるために間合いを積める。

「速い!?!」

間を置きながらなのはは驚くも狙う、一光は“死角に回らない”
と思ったのだ。

(このまま一気に間合いを積めて……断つ！)

自分の考えは読まれていた、砲撃など受けなければいいと兎に角動き回り攪乱した。

しかし、経験の差はここでも現れる。

「レイジングハート！」

『ダイバインシューター』

「シュートッ！」

左右に放たれた計六発の魔力弾は見事に自分の退路を断つと同時に射線を取った。

退こうが間合いを積みようが直撃コース。

それが何も持たない戦士なら。

「死ぬ気になれば、気合いで消してやらあっ！」

「ダイバイン・バスター！」

叫びと強がり重なった。

なのはの放つ収束砲は、僅かに届いていない。

『魔導削除』の宿る右掌を突き出した事で霧散していく。が、計算に入れていなかったのは白式で増大されるのは“デバイスに宿した物だけ”と言う肝心のことだ。

じりじりと押され始める、魔力の奔流が自分を飲み込むのは時間の問題だった。

(処理が追いつかない!?)

諦めた刹那、デイバインバスターは途切れて、代わりに衝撃に真上から襲われた。

いや、正確には動かない四肢のせいで誤認したんだろう。

「バインド!? 白式!」

『右腕だけ解除する、時間を稼いでくれ。マスター』

顔を弾くように上げると某格闘マンガの決め業みたく膨張した魔力の固まりとなのがいた。

「今のカズ君じゃ、解除間に合わないでしょ？」

悪魔の笑みで、なのはは小首を傾げた。

自分は思う、死刑宣告だと。

「受けてみて、コレが私の全力全開！」

「ちっ……」

『スターライトブレイカー』

「シューッッ！！」

「ちよっ、ちよっと待てーっ！！」

凄まじい桜色の魔力が鉄砲水の如く押し寄せ、アッパーカットの様に右拳を突き上げる自分、先のデイベインバスター・フルパワーでも立証されているとおり、『魔導削除』は収束砲関連を防ぐには不向きである。

「あーあー、ついにやっちゃったか」

「アレを凌ぎきれんたろうな」

「同感だ、幾ら一光が打たれ強くてもな」

「ヴェータ、ザフィーラ、シグナムの順で成り行きを予想するがはやてだけが、

「凄いなあ、カズ君魔法の勉強始めてウチとそんな変わらないのになのはちゃんに奥の手使わせてしもうたで！フェイトちゃん。」

とか超のんきに観戦していた。

「ああっ！なのは、カズが初心者ってすっかり忘れて!？」

フェイトは成り行きを心配していた、観戦組で唯一まともに。

言うまでもなく、医務室で目が覚めた。

『魔導削除』でバインドを消せば逃げられたかも知れないと気づいたときにはジリジリと桜色の魔力が押し寄せて文字通り潰された。

「痛……ここは？」

「医務室だ、まったくキミには驚かされる。」

クロノがいた、後意気消沈したなのはとフェイト。

「はは、やっぱり負けたか」

笑い飛ばす自分は、多分なのはを見ていた。

しゅんとしたなのはが異様に気になったからだろう。

「ゴメンね、まさかカズ君があんなに強いなんて思わなくて」

「いや、気にしてないからさ。次は勝てば良い話だ。」

「カズ、ホントに大丈夫？」

「大丈夫だって、フェイトちゃんは心配性だな。」

フェイトは「ホントに？」と念を押す、なのはの最大にして奥の手。つまりは切り札の“スターライトブレイカー”は下手な防御ではソレごと潰される。

直撃経験を持つフェイトはその威力を身を持って知っているのだ。

実際は辛い、軀の節々は未だに悲鳴を上げていた。しかし心配はかけたくなかった。

だから、強がって笑い飛ばす自分がいた。

負けたことは悔しい、次は勝つ気で居るのも事実。

それに白式もいる。

目が覚めるとまた風景は変わっていた。

「お、目が覚めたか？」

銀髪で目つきが鋭い、クール美人？がいた。

寝ていたのはソファのようでも手を突きそこねて自分は頭をもろに床に叩きつけた。

ボゴツ！とか異音が聞こえた。

めっさ痛いんですけど、そりゃあフローリングだもんね。

「えっと……ここは？」

自分はきよろきよろとして即座に質問、女性はいさし考える。

面識があったつもりだったらしく何故か気まづい空気が漂い始めた。

「おう、目が覚めたか？一光……リインフォースに惚れたか？」

悪戯な笑みでヴィータはからかってきた。

先の疑問も晴れ、てはいないが何となく何処か見当が付いた。

しかし、元二十歳からすれば惚れても可笑しくないよな、うん。

高嶺の花だな、手が届かん。

「リインフォース？ヴィータ、もしかしてはやてが言ってた」

自分の記憶力に半ば呆れた、つい最近の会話が思い出せない。

記憶を辿ること五分。

「ウチな、カズ君にあわせたい子がおるんよ」

「ほー、友達？」

「すずかちゃんとちゃうなあ、でもリインフォースも会いたがってるんよ」

「それは楽しみにしとくよ。」

読み込み完了、つまりこの犯人ははやてか。

犯人の察しも付いて一段落だが何故傍らでリインフォースが柔らかな笑みを浮かべていたのか？

「お前が、一光を気に入るとはな……」

微笑のシグナムだ、何か怖い。

ソレも仕方ない、普段からフルボッコにされているからな。

「将、何も可笑しいことはないだろう？我が主や「ストップや！」
我が主！？」

なんとまあ良いタイミングか、リインフォースが遮られて驚くついでにはやるとなのは、フェイトが真っ赤に顔を染めて買い出しだろつビニールが全てザフィーラに預けられている。

「おやまあ、リインフォース。さわやかに地雷原を走るね」

アルフだ、人間モードだからかザフィーラの彼女、で通せるかも知れない。

「カズ、今失礼なこと考えなかつたかい？」

素晴らしい、今期の使い魔は読心術が使えます。

しかしだ、何で全員集合？

「たまにはみんなでご飯も良いかなって」

フェイトが少し恥ずかしそうに言う。

言われてみれば、みんなと食事など最近取っていない。

リンディとエイミイは用意してくれるのだが魔法の特訓を優先し、つい四、五時間オーバーは平気でしていた。

確かにたまには良い息抜きにもなるだろうな。

「それに、カズ君のこともっと聞きたいし」

なのはも若干ではあるが恥ずかしそうに言った。

次元漂流者と言うだけで受け入れてくれた彼女らには身の上からいしか話していない。

あまり過去のことを話す気にもならなかったが良い機会かも知れない。

「そうだな、少なくとも高町やテストロッサよりは生きていたらしいからな」

「シグナム、らしきではなく事実だっつの」

からかうシグナムに食ってかかる自分。

しばし話が盛り上がった。

そして、リビングにはヴォルケンスとアルフ、自分が残っている。

三人が手料理を振る舞ってくれるらしいので楽しみではある。

「で、どうだ？若返った気分は」

と不意にリインフォースが問いかけてくる。

表情変化が読みとりにくいに興味津々というのは何となく分かる。

「まあ、短い人生だから……ありがた迷惑かな」

グッとコップを傾けながら、

「多分、自分でもよく分からないんだよ。」

「なんだよ、それ？」

聞き耳を立てていたヴィータがツッコむ。

「こんな事がなければ多分、なのはちゃんはやてちゃん、フェイトちゃんには出会わなかったし、こんな会話もなかったらうな。」

悟ったような自分、当然だが、前と今、どちらが充実してるかと言えは今だ。

「前よりは充実してても、なんか？」

シグナムは「そうか」と相づちを打つ。

「そうか、すまなかった」

「別に構わないさ、今生きる意味を見いだせないだけだ……」
「ッ!?」

結界が、それも展開と同時にあの敵が現れた。

黒い、流動的なソレはリインフォースへ無造作に拳を振るう。

台所でも異変は起きた。

結界の展開と同時にクリスタルゲージが発動。

「フェイトちゃん!はやてちゃん!」

セツトアップが間に合い、魔法を無力化した三人がリビングに逃げ込む。

何処からわいたか分からない黒いソレは、轟めいていた。

「リインフォース!」

「はやてが悲鳴を上げる。が、すぐに安堵した。」

細く華奢、しかし同年代男子にしては異様と言っているいい筋肉質の右腕が黒い雨を弾く傘のように立ちはだかった。

「いきなり何すんだ？」

先よりワンランク低く、怒りをかみ殺す声に黒い塊は答えない。

人型をしたソレには意志があり、最初に一光を襲撃した二人の内一人だった。

ほんの数週間見ぬ間に『魔導削除』を扱い抜いている事に黒い陰は驚いた。

能力を物ちからにしている。初見の時のようにただ触れた魔法を消すのではない、広げた掌から僅かにだが、範囲力バーでできるまで制御している。

「確か、お前は右手で消せるんだよな？」

リインフォースを庇うように前へ出た自分は、最初の言葉を思い出した。

私には『魔導削除』が作用するようだ。

闇の欠片同様で右手を、あるいは白式で斬れば片は付く。

「白式。」

『ああ、振るえ。マスター、闇を断て！』

白式の台詞を疑念に思うのは今は無理だった。

暖かい時間と空間を踏みにじったコイツを自分は許せなかった。

「ふうん、守護騎士に管制融合機、魔導師が三人か。」

値踏みするように、一太刀を破碎球で止めた少女はふつとなのはに目を留める。

「へえ、寂しさの内に怯える子……」

しかし、いつまでも見てるだけの連中ではなかった。

「ハアアアアッ！！」「」

自分が気合いを込める、声が重なりと左からは紫電一閃を繰り出さんとするシグナムがいた。

「がならないでよねえ、アタシ等やり合いに来たわけじゃないし。」

さらりと避けた少女を追撃はしない。

「すまない、助かった。」

「気にするな。」

やり合いに来たわけじゃない？ならば何故いきなり。

「私はただ闇の書の間、その管制デバイスを借りただけ。返さないけど。」

「なんだソレ！？がなるなって無理だろ！」

「そや！アンタラに渡すもんなんかない！！」

「それじゃ、“不滅なる闇”の三女とやる？私も参加するけど。闇の欠片事件は終わってないのよ！！」

流動的な陰は少女・ルチアに溶け込んでいく。

「不滅なる闇、歪みの欠片が闇と溶け合い生まれる闇の存在！それが私、ルチアよ！」

ルチアが高らかに宣言する。するとはやたとフェイト、髪型の違うのはが闇から現れた。

戦力差は一気に詰まったが、まだ自分たちが優勢だった。

リインフォースが無理できないとして非戦闘員に考えても六対四だ。

因みにこの勘定はシャマルとアルフ、ザフィーラを抜いたものだ。

「そつちも選出すれば？自信が無くて全員でってんなら構わないけど。」

凄まじい余裕だ。ルチアは余裕だけならこの場の誰よりも勝っている。

「確か、テメエには右手が効かないんだよな・・・」

ただ余裕が勝っているだけ、最初の頃よりは大分マシになった。

「キミを殺せば！」

見た覚えのある姿の、見たことある戦斧が振り抜かれ、箆手で受ける。

一撃は酷く軽い。

「なっ！フェイトちゃん!？」

目が合うと自分は驚いた。何せ襲ってきたのはフェイトだ。

姿形が瓜二つではないか。

「あの暖かで艶やかな血と怨差の闇に帰れるんだ！」

黒フェイトがフォトランサーを生成する。間を縫って離れた自分、しかし砲撃は距離を置かせまいとしていた。

「聞いていた人物とは大分違うようです。」

「そつだな、なのはちゃんなら今のは外さない！」

黒いバリアジャケットの短髪なのはを一瞥する。

二人、か。

歪みの欠片と言った、ソレはクロノとリンディの憶測で自分がこちらに来る要因を作ったかも知れないロストログアだ。

ルチアがソレと流れ着いた当日に起きていた闇の書の後被害の融合体なら、と勝手な自己解釈を進めていく。

あるゲームには主人公達の力と対をなす反存在がある、神はソレのようにルチアが暴れ出したとき歪んだ闇を“消す者”を対抗側に、つまり自分をこの世界に導いたのではないかと。

自己解釈を終えた直後に赤い短剣が飛来する。

「チイツ！」

瞬時加速で避け、八神家を後に誘導を試みた。

「こつちだ！ついて来いよ雑魚四人！！」

五人が後にした八神家、取り残されたメンバーは一光の素振りに疑念を抱いた。

何かを掴んだような、確信を持った目をしていた。

「一光は何かを掴んだな。」

シグナムはレヴァンティンを携えて歩き出す、何度も模擬戦じみたウォーミングアップをしたから分かるが、一光が四人同時に相手をするのは無理だ。

「シグナム、私たちが行きます」

シグナムを制したのはフェイトだった。

「そやね、あつちは劣化コピーやけど……カズ君分かってて斬らんかった。」

はやてが並ぶ。

「向こうの手に乗るのはしゃくだけど、一人で抱え込むのはカズ君らしくない。」

最後になのは。三人は一光の行動の意図を察することが出来た。

それはシグナム等も用意に察し、応援に駆けつけようとするほど。

リインフォースは、一光が、自分が原因だと思っていると理解できた。

似た経験をしたからだろうか、直感的にすぐ。

ただ、彼女は会って間もない彼を信頼できた。

我が主が好意を抱き、高町やテストアロツサも同様だ。大切な者を守りたい、そんな意志が伝わってきそうな顔をしている。

「大丈夫だよ、みんな」

飛び立つ三人、それを追おうとしていたシグナムとヴィータは驚いた。

「リインフォース！何でとめんだよ！？」

グイータは食ってかかる。

当然の反応だとリインフォースは思う。

彼女も駆けつけたと言う意志はある。しかし、先じてこの場から危険を取り払った少年はやってくれると何故か信じられた。

「守護してくれるよ、白い剣士が。」

融合機の彼女には見えていたのだろう、白式に宿る蒼き英霊が。

「魔導開放っ！」

闇の王と名乗りを上げた黒はやては収束砲・クラウソラスを放つ。

しかし自分は振り向き様に白式の刀身でソレを受ける。

「なんのっ!」

「小賢しい、私の攻撃を止めて無防備だろう?」

先から繰り返していることだ、誰かの攻撃を受ける「無力化」別の攻撃を防げない。

しかし、オリジナルの攻撃を知る自分にとってさほど苦しい状況ではない。

「喰らえっ!」

雷光の殲滅者、黒フェイトのハーケンが見事に決まった様に見えた。

「いやいやお前が喰らえ!」

長時間飛行が未だに出来ない自分は、飛行限界時間を利用して反撃している。

限界を迎えて落ち、黒フェイトに受けていたクラウソラスがヒッ

ト。
瞬時加速で黒なものに向かう。

零落白夜で確実に落とす、でなければ自分が持たない。

「流石、対をなす抹消者^{イレイザー}。ロストロギアがマスター・ルチアの対に選ぶだけはありません。」

なのは、とは違うのだろうか？妙に丁寧な口調だし、近づかれては砲撃も撃てなからう。

はて、マスターと言ったか。さて問題だ、ルチアとやらが主らしい。

つまり、ルチアから消せばいいと自分は結論づけた。

自分に言い聞かせる、人を斬るのではない。異常^{イレギュラー}を斬るんだ！なのはちゃんやフェイトちゃん、はやてじゃない。

「違う！」

光刃が、なのはと同じ顔をした人を裂いた。

ルチアが満足そうに高笑いする、比べ自分は酷く息を乱して違っていると連呼していた。

「アーハハハッ！対になった時点で今までの生活に戻れると思っ
た！？そんな訳ないじゃない！！！」

「あーっ！」

続いて闇の王、はやてと同じ顔をした誰かを。

「斬殺した！そうよっ！歪みはアンタに“殺人”を運命付けた！！」

更に雷光の破壊者、フェイトと同じ顔をした誰かを。

「はっ！はっ！はっ！……」

力が抜けた、今まで何が自分を支えていたか解らなくなった。

『ソレは違う。』

その声は、ルチアの歓喜を否定した。冷や汗が顔中を濡らしている、酷く気持ち悪くて顔を上げることすら出来ない。

『マスターは、貴方が利用しようとした写し身を救ったのだ。』

声の主は白式だった。

「所詮使われるだけの武器が！一端の説教？笑わせるなあ！！」

ルチアは高ぶった感情を抑えなかった。抑えることが出来なかった。

こんな早期に『本命』を内包した奴に出会えた事、対の存在が今にも崩れそうになっている事。

良いことだらけだ。

“彼”の理論が立証された少女も目の当たりにしたし、後は“彼”が目的を成す為の手駒を揃えるだけ。

ルチアは、崇拜した“彼”のためになら死ぬるとさえ思っている。だからこそ、後の障害となる『対』を未熟な内に消しておきたかった。

ソレが今、叶う！

「消えた子達の後を追わせて上げる！白騎士！！」

陰がルチアの腕を巨大な刃に変える、ルチアは躊躇うことなく刃を一光の首めがけて振り下ろした。

固い手応えの後、強い意志のこもった声が闇の渦に沈み掛けた自分を救い出す。

「させないっ！」

黄色い魔力刃が、闇の剣を阻んでいた。

「邪魔しないでよっ」

バルディッシュ・ザンパーを構えていたフェイトは、力負けした。込められた力に押し返されたフェイト、桜色の砲撃と赤い短剣がルチアを襲った。

「カズ君は仲間や！友達やっ！」

「所詮は脆い絆よ！」

「そんなことない！！！」

はやて、なのは、フェイト、彼女らの助太刀は心強い。

確かに友達と言う絆をいざというときに選ぶには脆すぎる絆だ。

しかし、捨てるには惜しいものだ。

自分は今、それを実感した。

「白式、こんな俺でも良いのか？」

『マスターは他の誰でもありません、このままで良いんです。』

ならば自分は、俺は、普通に戻れないのら出来るだけ“受け入れて背負う”。

自分はこの道を行く、歪んだ世界の欠片が生んだ幻想でもこの世界で過ごした時間は現実だ。

自分は確かに此処にいた。此処にいて力を得て彼女達と過ごした記憶は、時間は偽りではない。

世界に迷い込んで変な力を得た、魔法を知った共に駆ける剣も得た。

独りで決めるつもりだった。

ルチアや陰が出たとき、けじめをつける時だと。

“この世界”の友達には迷惑を掛けたくない、終わった闇が利用されたのは自分の責任、撒いた種は自分で刈る。

それが“罪”なら受ける、大層な覚悟が出来るようになったのは何故だろうか？

決まっている。

「なのはちゃん、フェイトちゃん、はやてちゃん、ありがとう」

眩いて、立ち上がる。

守りたいからだ、彼女達を！

「白式」

『零落白夜、発動』

こんな体験をする前に見た夢を思い出す。

ぶつかり合うのは黒と白、黒を先までショックと後悔に沈んでいた自分なら、白はきっとソレを乗り越えた自分だ。

なっついていこう、彼女達を守るために。強く、鋭い剣へ。

なのはがルチアの退路を塞ぐようにアクセルシューターを放ち、フェイトが仕掛けた時間差のバインドが前に出ようとしたルチアを捕捉する。

「おの、おのれえ！」

更にブリューナクをはやてが放ち、ルチアは宙に舞った。

丁度、全力開放状態の刃の軌道上だ。

「俺は、戻らない！」

一太刀で断つ、一刀両断だ。

拘束していたバインドごと武具となっていた陰を削ぐ。

「何で……魔導も動きも、付け焼き刃だったお前が！？」

的確に闇だけ殺げる！？

ルチアの顔にはそう書いてあった。

数週間のトレーニングに加え、魔法という未知の分野に触れた人が持つ高い適応力。

さらに白式の中にいる蒼き英霊と無意識化に同調していた結果、生まれた状態。

「そうか、それが貴様の力の正体か！」

ルチアが垣間見たのは、何処か投影された立体映像の様に時折ブレる青いヘルメットをかぶり、神父のような服の青年。

「「」ぢや「」ぢや煩い奴だなおい！」

苛立ちを抑えながら自分はルチアに切っ先を向ける。

後は捕らえて終わりだ。

「もうすぐ本隊が到着します。武装を解除し、投降してください。」

フェイトが凜として告げる。

中々言い出す場が無かったとは言え、まだ相手に投降を呼び掛けるか。

「私では無理だったただけだ、あの人が、やってくれる……」

ルチアが継る様に自身の装備を取る。

闇の陰をナイフにしたような漆黒の短剣だ、デバイスなのか鏢にある部分にはエメラルドの水晶パーツが組み込まれている。

「あの人とやらが止められたら？」

否定的に自分は白式を下段に構えたまま一步前に、なのは達は心配そうに一光を見ていた。

はやてからすればリインフォースを助けてくれた礼を言いたい。

なのはとフェイトは最初の頃、無茶な戦闘をしていた一光が心配

なのだ。

「有り得ないわ。多世界から“負”を抱える者を集めた彼なら！」

負を抱える者をかき集めた彼と称された少年は老人と共にいた。
否、ルチアが追いつめられる様を見ていた。

彼の与えた武器は、一光のレアスキルとは対極にあった。

消す力を受け持った剣『白式』、白式には通じなかった強制制御を宿す剣『霸王』。それすらも渡したのはレプリカだ。

天井から床まで試験管が直通し、その中に老人は浮いている。

『やはり、培養では上手く行かぬか』

老人がふうと息を漏らす、少年はその映像を見ながらルチアの思
いとは裏腹に切り捨てた。

なのは達が僅かに離れた隙にクリアバインド、文字通り透明な何かが進行を阻む。

「孤立か……」

自分でも酷く冷たい声でと思う眩き。

ソレも仕方ない、今は未来への希望など沸かないからだ。

「助けなんて期待するな素人！魔導は私の方が……」

「くどいつ！」

白夜一閃、ルチアは予想とは裏腹に魔力ダメージを受けた。

有り得ない、魔導は私の方が上……。

ルチアは繰り返し思い続けた。

生まれて、物心付いた頃から魔術・魔法の徹底された英才教育を
うけた。

つい最近知ったような奴に負ける要素はない、あつてはならない！

「あああああ……！」

その怒号は、悲しく響く。

「闇を利用した報いを受けやがれ。」

白式を完全展開した時、光が溢れた。

「それじゃあカズは帰れないの？」

フェイトがクロノに問う。

調べた結果、どうあっても帰れそうにないと言っのが管理局の答えだった。

平行する世界へ渡る術を管理局は持たない。

「ま、何となくは解ってたことだし」

と強がる自分、割り切りがつく、無理だと解れば。皆が皆、最後に漂わせた寂しげな雰囲気と表情を見逃さなかったわけではなかった。

「なら、一光君はどうするの？」

リンディが問いかけると自分は、答えを告げた。帰れなければ、取ると決めていた選択肢。

「管理局に入局しようと思います。ルチアの言ったとおり魔法に関して知りすぎたし、戻れる気もしない。」

「大凡でまだ決定ではないんだよ？」

「それでも分の悪い賭だし、白式とも話し合ったことだから。」

その目には決意が宿っていて、リンディはため息を吐いた。

先程の寂しげな表情が嘘のようだ。でも、二十歳そこそこでこの覚悟を強いた理不尽さに憤りも覚える、そんな境遇に会う不幸！と本人は茶化していたが本当に齊藤一光と言う少年は強いんだと思いきらされる。

因みにルチアは次元拘置所に幽閉された。

何でもロストロギアを利用した事が最大の要因らしい。

終わらない、両親には悪いが自分の“人生”は未だ終わらない。

平行世界で生きぬく、こちらに来たことに意味があると思じて。

星と雷光と夜天と白（後書き）

はい、成長編の完結です。

ご都合主義？いやはや聞こえない。

次作にはある作品をコラボさせます、キーワードは『蒼き英霊・老人』、もしかすると作中に出ていますか。

では。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8157/>

白い騎士と魔法少女達

2010年10月14日14時18分発行